



Title	語彙の上位・下位の間をめぐると「羊」と「茶」を例に
Author(s)	太田, 匡亮
Citation	EX ORIENTE. 2023, 27, p. 161-183
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/91323">https://doi.org/10.18910/91323</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◎研究ノート

## 語彙の上位・下位の関係をめぐる 日中対照研究

— 「羊」と「茶」を例に —

太田匡亮

### 1. はじめに

語と語の間には、類似・反対・対照・階層など様々な意味関係が生じうる。このうち階層関係は、「上下に層をなし、含み含まれる関係にあるもの」であり、これはさらに累積関係と上位・下位の関係に二分することができる。[沖森 2012: 20-23]

上位・下位の関係について、沖森 2012 では「弦楽器 ⇔ バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス……」という例が挙げられている。この例において、「弦楽器」は「バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス……」に比して言えば上位にあるので、「上位語」と呼べる。一方で、「バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス……」は「弦楽器」に比して言えば下位にあるので、「下位語」と呼べる。

この上位・下位の関係には言語間で差が見られることがあり、それがコミュニケーション上の問題となって、目に見える形で表れることもある。日本語母語話者 (J) と中国語母語話者 (C) の会話においては、筆者が実際に遭遇したものとして、次のようなミスコミュニケーションの例が挙げられる。

(1) J: 沖縄でヤギの肉食べてきた。

C：え、普通じゃない？ つまり羊の肉でしょ。

J：いや、羊じゃなくてヤギ！

(2) (上海のマクドナルドで緑茶・ウーロン茶の類がないか聞こうとして)

J：有没有茶？（お茶はありますか。）

C：有，有红茶。（はい、紅茶がございます。）

(1) の例では、日本語母語話者の角度から見ると、「ヤギの肉」は「羊の肉」とはなりえない。また、(2) の例では緑茶・ウーロン茶の類がないか聞こうとしたところで、Cは緑茶・ウーロン茶の類には一言も触れないまま紅茶についての返答をしており、すれ違いが生じている。つまり、「羊」「ヤギ」、「茶」「红茶」など各語が、どのような上位・下位のカテゴリー体系を形成しているかが、日中両言語で異なっていると考えられ、「羊」=「羊」、「茶」=「茶」という一対一対応の認識では問題があるとの予想が立つ！。

このほかにも、本稿では取り上げないが、分かりやすい事例として次のようなものもある。

(3) J：靴何足持ってる？

C：えーと、今履いてる靴と、サンダル1つと、スリッパ1つと……

J：え、サンダルとスリッパまで数える！？

このように上位・下位の関係をめぐる日中差は、日常的でごく簡単なやり取りにおいてもミスコミュニケーションを引き起こすことがある。「羊」や「茶」に関しては、特に中国の文化面からすれば類出の話題であると言えよう。“茶”が中国の名産品であることは論を待たないほか、“羊”は中国料理によく使われ、中国語に“膶”という“羊肉”の臭み専用の形容詞まで用意されていることから、その重要度がうかがい知れる。であるからこそ、中国語母語話者と日本語母語話者の会話で「羊」や「茶」が話題となり、これらの語の上位・下

位の関係をめぐる日中差が顕在化して、ミスコミュニケーションが起こるのである。このことを踏まえると、「羊」や「茶」は優先的に研究すべき代表例と言ってもよいであろう。そこで本稿では、実際のミスコミュニケーション事例から出発し、語彙の上位・下位の関係をめぐるケーススタディとして、日中対照の視点から①中国語の“羊”と日本語の「羊」、②中国語の“茶”と日本語の「茶」についての考察を行うこととする。

## 2. 先行研究

上位・下位の関係は、本稿冒頭に挙げた「弦楽器」と「バイオリン・ビオラ・チェロ・コントラバス・……」の例を見ても分かる通り、本来は純粋に意味的な関係であって、上位にあるものと下位にあるものの中で、言語形式の面でもつながりを持つ必然性はない。

とはいえ、日本語・中国語・英語を例に、上位・下位の関係と言語形式の間につながりを見出せるかどうかを考えてみると、言語ごとに個性が見られ、我々の興味を引く。英語においては、形態素レベルで接辞が一定程度、上位・下位の関係を表すことがある。西川 2021 を参考に、いくつかの例を挙げておく。

上位の意味を表す接尾辞：-(o)logy（学問分野）

下位の意味を表す語の例：psychology（心理学）、archeology（考古学）、  
theology（神学）、etymology（語源学）、……

上位の意味を表す接尾辞：-osis（病状）

下位の意味を表す語の例：cirrhosis（肝硬変）、cyanosis（チアノーゼ）、  
leukocytosis（白血球増大症）、tuberculosis（結核）、……

西川 2021 は西川 2006 の研究をもとに、英語の接辞の約 70% はラテン語・

ギリシャ語由来のものであると指摘している。こうした接辞は往々にして意味の推測が難しく、鈴木 1990 は、医学用語など高級語彙では特に、英語母語話者にとっても意味を察することが非常に難しい場合があるとの指摘をしている。また同時に、日本語のように漢字を用いる場合は、初見の語でも意味の見当がつくことを指摘している。これらの指摘を踏まえると、英語における上位・下位の関係は、接辞の形で言語形式に表れていることもあるが、そのことが必ずしも語彙理解に効果を発揮しているわけではない、と言えよう。

日本語と中国語はともに漢字を使用しているが、中でも中国語は、上位・下位の関係を漢字を軸として目に見える形で表す例がひとときわ目立つ。このことは、日本語を母語とする中国語学習者が特に意識すべき点である。比較的早い時期の研究では、呂叔湘 1963 が動植物名を取り上げ、次のように述べている。

在单音的动植物名字后面加上个类名，这也是一种双音化的手段。一般的情形，单音节后面的类名必不可少，双音节后面就可有可无，三音节以上的一般不再加类名。〔呂叔湘 1963: 12〕

(単音の動植物名の後ろに分類名を加えるのも、二音節化の手段の一つである。通常は、単音節の後ろの分類名は必須、二音節の後ろは任意、三音節以上のものには普通つけない。)

ここで言う“类名”(分類名)とは上位語のことで、呂叔湘 1963 は、単音節の“鯉”(コイ)にも“鯽”(フナ)にも“魚”を加えて“鲤鱼”“鲫鱼”と言うとの例を挙げている。これに関しては、日本語が単漢字で「鯉(コイ)」「鯽(フナ)」とだけ言えばよいのとは対照的である。また、二音節の“河豚”(フグ)は“河豚”のままでも“河豚魚”にしてもよいとしている。

宋宣 2008 は中国語の量的分析を行った上で、現代中国語の語彙体系においては、“语义范畴的表达是通过显性的构词手段来实现的。”(意味カテゴリーの表現は顕在的手段により実現されている)と述べている。この顕在的手段とは、宋宣 2008 が“类义语素”と呼ぶ、上位の意味カテゴリーを表し、かつ生

産性の高い形態素のことである。

宋宣 2008 は中国語と英語の比較を通して、前述の主張を強化している。“車”（車輪を持つ陸上交通機関・輸送機関）に関する例を下に引用する。

中国語	英語
汽车	automobile
客车	bus
货车	wagon
马车	carriage
卡车	truck
火车	train
救护车	ambulance
自行车	bicycle [宋宣 2008: 95-97]

このほか、秦炯灵 2000、陈长书 2013 などは、形態素 A と上位の意味を表す形態素 B を組み合わせて作られる下位語 AB のうち、例えば“松树”（松の木）のように、形態素 A（“松”）と下位語 AB（“松树”）の意味が同じになるようなパターンのものに注目し、研究者によりやや定義に違いはあるとはいえ、これを特別に取り上げて“种属式复合词”“种属型复合词”などと呼んでいる。これらの研究も、中国語語彙の特徴を知る上で大変重要なものである。

以上のように、中国語においては、上位・下位の関係を目に見える形で表す例が少なくないことが指摘されている。具体的には、下位語の語末に、上位の意味を表す形態素が現れる形となっている。

ここで、中国語から日本語へも目を向けていきたい。日本語においては、言語形式の面で中国語ほど体系的ではない。日中対照研究としては、中川 2005、2017 がまず挙げるべき研究であるが、中川 2005 は“片”（フィルム）を例に挙げ、中国語は下に示すように一貫して「分類の根拠＋“片”」の形をとるのに対し、日本語は無秩序とも言える状態であることを指摘している。

中国語	日本語
喜劇片	コメディ
悲劇片	悲劇
愛情片	ラブストーリー
偵探片	探偵もの
科幻片	SF 動画片 アニメーション [中川 2005: 69-70] <sup>2</sup>

荒川 2013、2014 も“筆”（書くもの）を例に同様の指摘をしている。

中国語の“筆”が=筆でないのを読者はご存じであろう。中国語の“筆”とは、「書くもの」であり、以下のように他の筆記用具の総称である。

鉛筆 鉛筆／圆珠筆 ボールペン  
蜡筆 クレヨン／毛笔 ふで  
粉筆 チョーク／钢笔 ペン

(中略) 中国語はすべて“筆”を上位概念としてきれいな体系をなしているのに対し、日本語は漢語、和語、洋語と語種のオンパレードである。  
[荒川 2014: 11-12]

また日本語においては、上位語と下位語が同じ語で表されるという特徴も見受けられる。中川 2005 は次のように指摘している。

あるとき中国人留学生が、日本人は「瓜」の絵が描けるのですねと驚いたことがある。中国語の〈瓜〉は〈黄瓜（キュウリ）、西瓜（スイカ）、苦瓜（ニガウリ）、木瓜（パパイヤ）〉などの多様なものの総称、上位概念であって、絵に描くには漠然としすぎている。

本来上位概念は、このように個々の特徴を捨象した抽象的なものである。

しかし日本語では、「瓜」が「西瓜、胡瓜、苦瓜、メロン」などと同レ

ベルにある具体的なものに属しながら、『瓜類』の代表として上位概念を兼ねている。

（中略）

日本語ではこの「瓜」のように、下位概念に属するものが、上位概念を表す語と共通していることが少なくない。たとえば、「車」は「乗用車、電車、汽車、自転車」など様々な乗り物の上位概念であるはずであるが、ふつう「車」といえば乗用車が連想される。[中川 2005: 59-60]

日本語におけるこのような現象を指摘しているのは、中川 2005 だけではない。城生 1990 も、「トリ」は「①全体が羽毛でおおわれていて、多くは空を飛ぶことができる二本足の動物。くちばしがある」と「②ニワトリ（鶏）のこと」を表すが、①と②の間には上位・下位の関係を見出すことができ、②は①の下位語と言えると指摘している。[城生 1990: 150-151]

上記のような日本語の性質も、中国語とのずれの一因となっており、日中コミュニケーションの場においても話をややこしくしている。したがって、上位・下位の関係をめぐっては、先行研究で挙げられているものにとどまらず、一つ一つケーススタディを積み上げていくことが必要だと考えられる。

ケーススタディを積み上げていくにあたっては、今回は考察対象となっていないが、“靴”と「靴」のように、中国語の「非単純語構成形態素（単独では語になれない形態素）」と日本語の「語」を比較対照する場合も出てくる。このような研究と本稿の研究の整合性を考慮し、次節以降では「上位語」「下位語」という語は用いず、中川 2005、2017 や荒川 2013、2014 などとも参考にし、「上位概念」と「下位概念語」という表現に変えることとする。「上位語」と異なり、「上位概念」には語も非単純語構成形態素も含まれることになる。

### 3. “羊” と「羊」について

まずは本稿冒頭に挙げたミスコミュニケーションの事例から、中国語の“羊”



と日本語の「羊」について考えてみたい。より体系的な振る舞いを見せる中国語から先に見ていき、続いて日本語とのずれを探ることとする。

### (1) 上位概念“羊”と下位概念語“X羊”

中国語の上位概念は、先行研究の指摘からも分かるように、もっとも典型的には下位概念語の語末に、例えば“X羊”のような形で現れる。このとき“X”は修飾成分、“羊”は被修飾成分である。『現代汉语词典（第7版）』を調べてみると、“羊”は上位概念として次のような下位概念語の中に現れる。

菜羊（食用の“羊”） 羔羊（子どもの“羊”） 黄羊（モウコガゼル） 羯羊（去勢された雄の“羊”） 羚羊（カモシカ、レイヨウ、アンテロープ、ガゼル、サイガなど） 绵羊（メンヨウ） 奶羊（乳用種の“羊”） 盘羊（アルガリ） 山羊（ヤギ） 头羊（一群のヒツジの先頭を行く“羊”） 岩羊（バーラル、アオヒツジ） 藏羚羊（チルー、チベットカモシカ）

上記から分かるように下位概念語は均質ではなく、「モウコガゼル」「アルガリ」のような動物の種類を表すものもあれば、「食用のもの」や「子ども」を指すようなものもあるが、いずれも中国語においては、目に見える形で“羊”という上位概念の範囲内に振り分けられている。中国語の上位概念は、中川2005の指摘では、絵に描くことが容易ではない、個々の特徴を捨象した抽象的なものとされているが、様々な動物が含まれる“羊”も例外ではなく、その抽象度の高さを見て取ることができる。

動物の種類を表す下位概念語に注目すると、いずれもウシ科動物の範囲に収まっており、中国語の“羊”というのは、むしろ動物学上は不十分な記述であるが、おおざっぱに言って「ウシ科の中でもヒツジかヤギに似た見た目の動物」となるだろう。

黄羊      モウコガゼル      ウシ科チベットガゼル属

羚羊	カモシカ	ウシ科カモシカ属、あるいはレイヨウ
	レイヨウ	ウシ科哺乳類のうち、ウシ亜科・ヤギ亜科を除いたもの = アンテロープ
	ガゼル	ウシ科ガゼル属
	サイガ	ウシ科サイガ属
綿羊	メンヨウ	ウシ科ヒツジ属
盘羊	アルガリ	ウシ科ヒツジ属
山羊	ヤギ	ウシ科ヤギ属
岩羊	バーラル	ウシ科バーラル属 = アオヒツジ
藏羚羊	チルー	ウシ科チルー属 = チベットカモシカ

ただし、“羊”も常に抽象的だとは断言できない。“羊”が上位概念であることに違いはないが、「ヤギ」「メンヨウ」あたりが“羊”というカテゴリーのプロトタイプ（prototype）であって、一般的に想起されやすい下位概念語だという指摘もできるだろう。

“羊 Y”（“羊”は修飾成分、“Y”は被修飾成分）の形の語にまで視野を広げた場合、中国語母語話者でも一定の条件が整えば、“羊”がどのような種類の動物か、具体的に思い浮かべることが可能な場合も出てくる。“羊肉”（“羊”の肉）の“羊”については、ヤギの肉には脂が少なく中国で好まれやすいということから、「ヤギの肉」を優先的に想像する人が見られる。「ヤギ」を思い浮かべる傾向は、中国西部出身で特にムスリムの、“羊肉”の食用頻度が高い中国語母語話者であれば顕著である。一方、“羊毛”（“羊”の毛）の“羊”からは、「毛が取れる動物」という点から、しいて言うなら「メンヨウ」が想像されやすい、といった傾向が指摘できる。

要するに、抽象的な上位概念“羊”にも、プロトタイプとして「ヤギ」「メ

ンヨウ」あたりを挙げることは可能であり、「肉を食用にする」「毛を取り用いる」といった一定の文脈情報が加われば、中国語母語話者も具体的動物を想起しうる点は、付言しておきたい。

## (2) 日本語「羊」とのずれ

日本語で「羊」と言った場合、日本語母語話者は何の迷いもなく、「メンヨウ」を指すと考える。このとき中国語とは異なり、いかなる文脈も必要とせず即座に、毛の取れる家畜用の羊の姿を、絵に描けるレベルで具体的に思い浮かべている。つまり、「羊」＝「メンヨウ」となっている。

一方で、「羊」をあえて抽象的上位概念としてとらえた場合は、日本語でも「ヤギ」は漢字で「山羊」と書き、「レイヨウ」は漢字で「羚羊」と書くことから、「羊」は本来、「メンヨウ」「ヤギ」「レイヨウ」などの上位概念と言えるはずである。ジャコウウシ（ウシ科ジャコウウシ属）の別名が「麝香羊（ジャコウウヒツジ）」となっていることも、「羊」が一定の抽象性をもちうることの証左であろう。ただし中国語と異なるのは、日本語母語話者は実際の言語使用において、このように抽象的な上位概念を頭に浮かべることが、皆無に等しいという点である。日本語も漢字を使用しているとはいえ、漢字を軸に中国語ほど規則的な語彙体系をなしているとは言い難い。繰り返しになるが日本語の場合、現実にはあくまで「羊」＝「メンヨウ」となっている。

上記の事柄を中川 2005 の表現を借りて言い換えると、日本語において「羊」は「具体的なものに属しながら、上位概念を兼ねている」例だと考えられる。このように日本語には、「上位概念と下位概念の混同」が見られるのである。  
[中川 2005: 59-61]

ここで、下にミスコミュニケーションの事例を再掲する。

(4) J：沖縄でヤギの肉食べてきた。

C：え、普通じゃない？ つまり羊の肉でしょ。

J：いや、羊じゃなくてヤギ！（(1) 再掲）

中国語と日本語とのずれを踏まえて考えると、ミスコミュニケーションの原因が浮かび上がってくる。中国語においては、“羊”は抽象度の高い上位概念で、下位概念語“山羊”“绵羊”“菜羊”“奶羊”などの上位に位置するものである（下図1）。

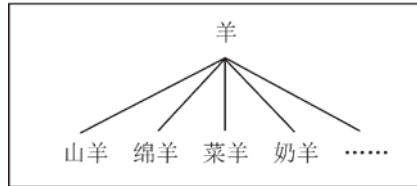


図1 中国語の“羊”

したがって、“羊”から具体的動物を想起することは義務的ではなく、この上位概念を用いて“羊肉”と言った場合は、“山羊”の肉でも“绵羊”の肉でも構わない。このため中国語母語話者は、(4)の会話のように「ヤギの肉」を「羊の肉」として理解するのである。

一方日本語においては、上位概念と下位概念が同じ語で表される傾向が強く、両者が形の面できれいに分かれずに、「羊」＝「メンヨウ」となる。したがって、「羊」は「ヤギ」「レイヨウ」などの動物と同じレベルで並び立つことになる。

羊（＝绵羊） 山羊 羚羊 ……

このため日本語母語話者は、「ヤギの肉」と「羊の肉」を、同じレベルに並び立つ別々のものとしてとらえ、両者に上位・下位の関係を見出すことはない。このような日中差がミスコミュニケーションの原因と考えられる。

#### 4. “茶”と「茶」について

続いて、やはり本稿冒頭に挙げたミスコミュニケーションの事例から、中国語の“茶”と日本語の「茶」について考えてみたい。前節同様、中国語、日本語の順で見えていく。

##### (1) 上位概念“茶”と下位概念語“X茶”

『現代汉语词典（第7版）』を調べてみると、“茶”は上位概念として次のような下位概念語の中に現れる。

白茶（白茶） 冰茶（アイスティー） 果茶（果肉入りのジュース・茶）  
黒茶（黒茶） 紅茶（紅茶） 花茶（花の香りをつけた茶・ハーブティ）  
黄茶（黄茶） 緑茶（緑茶） 毛茶（製品になる前の原料茶） 奶茶（ミルクを入れたお茶） 青茶（青茶） 清茶（緑茶） 沱茶（碗形に圧縮した茶）  
芽茶（若芽からとった細い上等のお茶） 砖茶（茶の葉を蒸してれんが状に固めたお茶） 工夫茶（中国茶道によって飲む中国茶） 普洱茶（プーアル茶） 酥油茶（バター茶） 烏龍茶（ウーロン茶）

“茶”は狭義には、「碗形に圧縮した茶」「れんが状に固めた茶」のように茶葉そのものや、「ミルクを入れた茶」「バター茶」のような茶葉を用いた飲み物を指す。上に挙げた下位概念語の中には、「果肉入りのジュース・茶」「花の香りをつけた茶・ハーブティ」のように、茶葉を用いるとは限らない飲み物も含まれている。しかし、出身地域も異なる複数の中国語母語話者によれば、これらも上位概念“茶”の範囲内と認識されるという<sup>3</sup>。

ただし、“茶”は文化と深く関わるもので、上位概念“茶”の範囲認識には地域性なども影響して、かなりの個人差が見られる。『現代汉语词典（第7版）』には掲載のない語であるが、“冬瓜茶”（トウガン茶）は、中国大陸出身者は一

種の“茶”と認識する一方、台湾出身者は“茶”ではないとする。このように、中国語全体として見たとき、“茶”の範囲（境界線）はフエジーであり、はっきり線引きすることは困難であると考えられる。ほかにもいくつか興味深い語を取り上げて見ておきたい。

“茶”は時として、隣接関係により意味が広がり、「茶と食事」の両方を指しうる場合がある。中国南方の“早茶”（朝にとる茶と軽食）がそうである。このとき“茶”は欠かせない存在であり、“茶”なくして“早茶”は成り立たない。とはいえ、明らかに“茶”と異なるものまで含む例は、下位概念の一つとするには無理があるだろう。加えて、このような語は、日本語で「お茶をする」と言うとき軽食を含みうるのと共通しており、本稿で扱う必要性も薄いと考えられるため、これ以上踏み込まないこととする。

また、“广西油茶”は茶葉を用いて作られたお茶漬け状のものであり、その意味では“茶”とのつながりが指摘できるので“茶”の下位概念語と呼べるのかもしれないが、広西チワン族自治区出身の母語話者に確認したところ、そのような認識はなく、動詞には“喝”（飲む）を使いつつも、むしろ食べ物としてとらえているのだという。

以上をまとめると、中国語の上位概念“茶”は意味的にかかなりの広がりを持っており、その範囲には一定のあいまい性が見られる。“X茶”の形の語のうち、「茶葉そのものや、茶葉を用いた飲み物」を指す語は確実に下位概念語となるが、判定の揺れる語や、一般的認識として上位概念“茶”に含まれない語もいくらか存在する。

## (2) 日本語「茶」とのずれ

日本語においては、「緑茶」が「茶」であることを疑うことはない一方で、判定の厳しい母語話者は「ウーロン茶」のような中国茶も、日本のものではないからという理由で「茶」から排除したいとする。また、「紅茶は茶ですか」と質問すると頭をひねって考え込む母語話者が少なからずおり、判定結果にも揺れが見られる。

一方で、中国語においては漢字がより有力な判断基準となり、中国語母語話者であれば年齢層や出身地域を問わず、“乌龙茶”も“红茶”も“茶”であると即答する。日本に住むある中国語母語話者は、日本のスーパーで緑茶・ウーロン茶・麦茶・ほうじ茶などが一つの棚にあるにもかかわらず、紅茶だけが別の棚にあるのを見て、不思議に思ったという。

ここで、本稿冒頭に挙げたミスコミュニケーションの事例を見直してみたい。

(5) (上海のマクドナルドで緑茶・ウーロン茶の類がないか聞こうとして)

J：有没有茶？（お茶はありますか。）

C：有，有红茶。（はい、紅茶がございます。）((2) 再掲)

この例については少し場面説明をしておかなければならない。日本語母語話者が「茶」からどのような種類のものを頭に浮かべるかは、発話場面の影響を強く受けるからである。

当時まだ中国語を学び始めて間もないJは上海のマクドナルドで、「きっと中国で緑茶かウーロン茶を注文すれば、日本のお茶よりおいしいはずだ」と考え、緑茶かウーロン茶が出てくるだろうとの見込みで、“有没有茶？”（お茶はありますか。）と聞いている。しかし中国人店員Cには、「緑茶かウーロン茶」という見込みは全く伝わっておらず、Cはこれら2種類には一言も触れることなく、“有，有红茶。”（はい、紅茶がございます。）と“红茶”についての返答をしている。この返答を唐突に感じたJは、一瞬固まってしまった。

ここでも、中国語と日本語とのずれを踏まえて考えると、ミスコミュニケーションの原因が浮かび上がってくる。中国語においては、“茶”は上位概念として、下位概念語“緑茶”“红茶”“果茶”“乌龙茶”などの上位に位置するものである（下図2）。

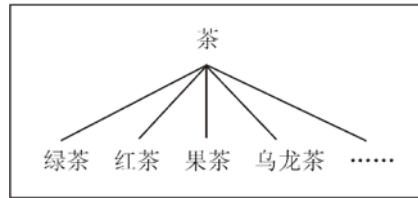


図2 中国語の“茶”

したがって、実際のところ中国のマクドナルドにはそもそもウーロン茶の類はなかったのであるが<sup>4</sup>、中国語で“有没有茶？”（お茶はありますか。）と聞かれて、肯定形で“有，有红茶。”（はい、紅茶がございます。）と答えるのは、ごく自然な返答であったと言える。

しかし日本語の場合、返答の傾向が異なるようである。日本国内のマクドナルドでアルバイトをしている母語話者3人に、「爽健美茶を切らしており紅茶しかない」場面で「お茶はありますか。」と聞かれたときの返答を確認したところ、中国語のような「はい、紅茶がございます。」との返答にはならないという。むしろ「いいえ、紅茶しかございません。」の方が自然であり、「紅茶」は「茶」と似ているが別物という認識のようである。筆者自身の語感もこれに近いものである。

Jの発話もこのような語感を前提としており、「緑茶」や「ウーロン茶」だけを頭に浮かべつつ“有没有茶？”（お茶はありますか。）と尋ね、“有，有红茶。”（はい、紅茶がございます。）という返答には、想定外のため面食らって固まってしまったのである。このような場面では、Jは本来、“有没有绿茶或乌龙茶？”（緑茶かウーロン茶はありますか。）のように具体的な下位語を用いて聞くべきであったと言えるだろう。

この例については非常に細かな場面状況を踏まえてアドホックとも思われる記述をしたが、これは日本語において、「どのような場面か」という語用論的要素が、日本語母語話者が頭の中に浮かべる「茶」の種類に影響するからにはかならない。とはいえ、もう少しマクロの外国語運用の角度から見ても、



「ファーストフード店でお茶を注文する」という場面自体はさほど珍しいものではなく、その場面で上位・下位の関係をめぐる日中差が実際に問題になるのだということは、あわせて確認しておきたい。

なお、日本語ではほかにも、「日常的に『紅茶』を飲む習慣があるか」といった個人的背景も判断に影響を与える可能性がある。ある日本語母語話者は、「お茶はありますか。」「はい、紅茶がございます。」とのやり取りにも全く違和感がないとの回答であったが、「家で日常的に紅茶を飲んでいた」という習慣の影響があるのではないかと、本人からの補足コメントがあった。

日本語において「茶」の範囲認識に幅広い個人差が見られるのは、中国語と異なり、「茶」がそれほど上位概念として機能していないことを物語っている。「羊」の部分で述べたことの繰り返しになるが、日本語母語話者は実際の言語使用において、「茶」から中国語と同程度に抽象的な上位概念を頭に浮かべることが、あまりないのであろう。それよりもむしろ、「東洋のものか西洋のものか」「国産品か舶来品か」など個々人の恣意的基準や、「どのような場面か」といった語用論的要素が優先的に働き、「茶」の範囲認識に幅広い揺れが出て、結果、判定に一致を見ないのだと考えられる。日本語も漢字を使用しているとはいえ、やはり、漢字を軸に中国語ほど規則的な語彙体系を形成しているとは言い難い。このような語彙の上位・下位の関係をめぐる日中差が、ミスコミュニケーションにつながったと考えられる。

## 5. 外国語教育への応用——中国語教育を中心に

ここまでの内容をまとめると、「羊」に疑いなく「山羊」を含む中国語と、「羊」に一般的には「山羊」を含まない日本語、「茶」に疑いなく「紅茶」を含む中国語と、「茶」の範囲認識に幅広い揺れの生じる日本語、といった上位・下位の関係の違いが、日中ミスコミュニケーションの原因と考えられることが分かった。

現実にはこのようなミスコミュニケーションが起こっているのは、当該語彙項

目の知識が教育現場でも教授内容から漏れているという可能性を示唆している。日常的でごく簡単なやり取りに必要な語彙知識は、日本語教育や中国語教育の現場でカバーできれば理想的であるが、現実には次のような問題がある。

- ①初級段階で、語彙知識のうち日中に共通する理解しやすい部分のみを教授したのち、日中差の見られる細かでややこしい部分の知識については、中級・上級段階に至っても追加で教授される機会がないこと。
- ②語彙知識の獲得そのものが、学習者自身の偶発的な気付きや学びに任せられており、非ネイティブ教師も含め、「偶発的な気付きのチャンス」がなかった学習者は、何十年学習を継続していてもその知識が抜け落ちたままになること。

これを、本稿で取り上げた（1）や（2）の事例に沿って表現すれば、次のように言える。

- ①初級段階で、「羊」と“羊”、「茶」と“茶”の語彙知識のうち、両者が対応する理解しやすい部分のみを教授したのち、両者に日中差の見られる細かでややこしい部分の知識については、中級・上級段階に至っても追加で教授される機会がないこと。
- ②「羊」と“羊”、「茶」と“茶”に関する語彙知識の獲得そのものが、学習者自身の偶発的な気付きや学びに任せられており、非ネイティブ教師も含め、「偶発的な気付きのチャンス」がなかった学習者は、何十年学習を継続していてもその知識が抜け落ちたままになること。

したがって、教育上のニーズを踏まえると、例えば中国語教育の中では上記の問題に対する解決策として、次のような知識を明示的に提供する準備が必要であろう。ここで言う「知識を明示的に提供する準備」というのは、「教師が知識を持っている」という段階であり、授業実践とはなお距離がある。

“羊”：日本語の「羊」のみとは限らず、“山羊”“羚羊”などの動物も包括する総称である。したがって“羊肉”も「羊の肉」とは限らず、「ヤギの肉」も指しうる。

“茶”：日本語の「茶」と一致しているとは限らず、“红茶”“花茶”“果茶”などの飲み物も包括する総称である。“广西油茶”などは飲み物ではない点に要注意。

実際の授業時は、上に挙げたような語彙知識を一度で全て提供することは、やはり現実的ではない。まず、状況に応じて内容の絞り込みが必要であるし、導入するにしてもさらに何段階かに分ける必要がある。例えば次のような段階分けが考えられる。

“羊”：

- ①初見時：“羊”の初回導入では、従来通り「羊」とだけ教える。
- ②補足1：“羊肉”という語（『HSK 考試大綱』（HSK 試験ガイドライン）語彙表2級レベル）がほどなくして導入される。この段階で、“羊肉”は「羊の肉」とは限らず、「ヤギの肉」も指しうることを補足する。
- ③補足2：「ヤギ」は日本語でも「山羊」と書くこと（常用漢字表外の知識）を確認した上で、日中同形語“山羊”の“羊”の部分、すなわち上位概念形態素に注意を向ける。ここから、“山羊”は“羊”の一種で、翻って“羊”とは「羊」のほか「山羊」なども含む総称であることを補足する。
- ④教師のみが知っていればよい部分：“羊”の下位概念語でも、“羚羊”（レイヨウ）などは基本的に取り上げず、特別必要な場合にのみ補足する。“羊”はウシ科動物の範囲に収まり、「ウシ科の中でもヒツジかヤギに似た見た目の動物」といった説明は、いかにも研究分析用の記述であり、これを授業で持ち出す必要はない。

“茶”：

- ①初見時：“茶”の初回導入では、従来通り「茶」とだけ教える。
- ②補足1：“绿茶”“红茶”という語（『国際中文教育中文水平等级标准』（国際中国語教育 中国語レベル等級基準）語彙表3級レベル）がほどなくして導入される。この段階で、「日本語で、紅茶は茶だと思いますか。」と発問する。学生が顔を見合わせ迷いを見せたところで、中国語母語話者なら迷いなく“红茶”は“茶”だと即答することを補足する。
- ③補足2：日中同形語“绿茶”“红茶”の“茶”の部分、すなわち上位概念形態素に注意を向ける。ここから、“红茶”は間違いなく“茶”の一種で、翻って“茶”とは典型的な「绿茶」のほか、やや周辺的な「紅茶」なども含む総称であることを補足する。
- ④教師のみが知っていればよい部分：“茶”には飲み物以外の紛らわしいものもあるが、“广西油茶”（広西チワン族自治区の、茶葉を用いて作られたお茶漬け状の食べ物）などの知識は基本的に取り上げず、特別な場合にのみ補足する。

さらに踏み込んで言えば、“羊”“羊肉”や“茶”“红茶”などの語が、全て上に挙げた順で教科書に出てくる必要はない。教科書は多くの場合、新出語彙が何度も繰り返し出てくるように設計されている。したがって、“羊”でも“羊肉”でもどの語でもよいので、同じ語が2回目以降に出てきたタイミングを利用しながら、情報を徐々に補足していく方法も可能である。

## 6. まとめ

本稿では、筆者が実際に遭遇した日中ミスコミュニケーションの事例を問題意識の出発点として、語彙の上位・下位の関係をめぐり、中川 2005 をはじめとする先行研究の指摘を踏まえつつ、“羊”と「羊」、「茶」と「茶」のケーススタディ研究を行った。その結果、中国語と日本語の間には上位・下位の関係

の違いが指摘でき、これが日中ミスコミュニケーションの原因と考えられることが分かった。

最後に、もう少し俯瞰的な視点からも問題をまとめておきたい。中川 2005、宋宣 2008 などの指摘とも重なるが、中国語においては上位概念を表す漢字（形態素）を軸にした造語が広く行われている。そして、中国語母語話者は少なくとも日本語母語話者に比べれば、漢字によって表される上位概念をより強く意識しながら各種の語を使用していると考えられる。一方日本語においては、やはり漢字が一定程度上位概念を表しうるとはいえ、日本語母語話者は上位概念を表す漢字にそこまで強い意識を持たないようである。

したがって、日本語母語話者に対する中国語教育では、上位概念を表す漢字（形態素）に注目し、一つ一つ、より正確に理解していくことを促す方法を考える必要がある。翻って中国語母語話者に対する日本語教育では、中国語の中で上位概念を表す漢字（形態素）が負の転移を引き起こすことがあるため、日本語語彙の上位・下位の関係を、一つ一つ、より正確に理解していくことを促す方法を考える必要がある。その基礎となるのが、上位・下位の関係をめぐる各ケーススタディの日中対照研究だと言えよう。

※本稿は 2021 年 8 月 21 日第 12 回中日対照言語学シンポジウムで発表したものに、加筆・修正したものである。

#### [注]

- 1 本文中では以下、日本語は「」で、中国語は“”でくくることとする。ただし一部に、日本語と中国語両方を合わせて「」でくくっている部分もある。
- 2 中川 2005 では、中国語も日本で用いられる漢字で表記している。
- 3 この点は、茶葉を含まない「麦茶」を「茶」に含める日本語とも似通っている現象であり、さほど疑問はないであろう。なお、下位概念語同士にも、「ウーロン茶」は「青茶」の中に含まれる、というように、さらにいくつかの階層を見出すことができるが、この階層性については特に問題にする必要はないので、本稿では深入りしない。
- 4 飲品 | 麦当劳官网 <https://www.mcdonalds.com.cn/index/Food/menu/beverage-2>（最終閲

覧：2022年11月17日）

[参考文献]

（日本語）

荒川清秀

2013 「日中字音語基の造語機能の対照」『現代日本漢語の探究』東京堂出版、東京。

荒川清秀

2014 『中国語を歩く——辞書と街角の考現学〈パート2〉』東方書店、東京。

沖森卓也編著、木村一、鈴木功真、吉田光浩著

2012 『語と語彙』朝倉書店、東京。

城生佰太郎

1990 「言語学は科学である「象ガ国会デ宿題ヲ忘レル」不思議への招待」情報センター出版局、東京。

鈴木孝夫

1990 『日本語と外国語』岩波書店、東京。

中川正之

2005 『漢語からみえる世界と世間 日本語と中国語はどこでずれるか』岩波書店、東京。

中川正之

2017 「楊凱栄教授還暦記念論文集によせて 中国語語彙の細分化とカテゴリー帰属」『楊凱栄教授還暦記念論文集 中日言語研究論叢』朝日出版社、東京。

西川盛雄

2006 『英語接辞研究』開拓社、東京。

西川盛雄

2021 『接辞から見た英語 語彙力向上をめざして』ひつじ書房、東京。

文化庁

2010 「常用漢字表（平成22年11月30日内閣告示）」[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo\\_20101130.pdf](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf)（最終閲覧：2022年11月18日）。

（中国語）

陈长书

2013 「试论汉语种属型复合词的结构特点和规律」『現代中国語研究』（15），109-120，東京。

教育部中外语言交流合作中心

2021 『国际中文教育中文水平等级标准』北京语言大学出版社，北京。

孔子学院总部 / 国家汉办编制

2015 『HSK 考试大纲 一 - 六级』人民教育出版社, 北京。

吕叔湘

1963 「现代汉语单双音节问题初探」『中国语文』(1), 10-22, 北京。

秦炯灵

2000 「种属式复合词论略」『上饶师专学报』(2), 69-72, 江西。

宋宣

2008 「现代汉语类义语素与语义范畴的显性表达」『毕节学院学报』(2), 92-98, 贵州。

中国社会科学院语言研究所词典编辑室编

2016 『现代汉语词典(第7版)』商务印书馆, 北京。

## 汉日词汇上下位体系对比研究 ——以“羊”与“茶”为例——

太田匡亮

本研究意图通过汉语“羊”与日语「羊」、汉语“茶”与日语「茶」这两个具体案例分析指出，汉日两种语言中一般被认为意思相对应的词语之间，有时会在上下位体系上的差异，并且这种差异有时也会造成中日语言交际上的问题。

在汉语中，上位概念“羊”泛指“山羊、绵羊、羚羊”等各种动物，而在日语中，上位概念「羊」不包括「山羊、羚羊」而专门指「綿羊」一种。

类似的情况还会出现在其他上位概念范畴上，例如“茶”。在汉语中，“茶”泛指“绿茶、红茶、乌龙茶”等各种种类的茶，而在日语中，上位概念「茶」不一定包括「紅茶」有时受语境、个人语言习惯等因素，甚至将「烏龍茶」都排除在外，专门指「綠茶」一种。这样的上下位体系上的差异有时也会造成中日语言交际上的问题。

基于此，本文最后还指出：对于日语为母语的汉语学习者而言，学习汉语时需要更加注意汉语中的上位概念语素；对于汉语为母语的日语学习者而言，学习日语时，汉语中的上位概念语素容易造成母语负迁移，因此日语学习者需要更加注意日语词汇中的上下位体系。



